

# アウグスティヌスの聖餐理解

宮 谷 宣 史

—

アウグスティヌスは聖餐をどのように理解していたのであろうか。これは興味ある主題ではあるが、扱い方は簡単ではない。<sup>(1)</sup>そこで問題の所在を明らかにする意味で、予備的なことを少し述べることから始めたい。

まず、アウグスティヌスが聖餐に関してまとまった著作を残していない事実がある。次に、アウグスティヌスが聖餐について論じている箇所を手掛かりに、彼の当主題に対する見解を明らかにしようとする場合、いくつかの解釈の可能性があるため、異なった結論がしばしば導き出されているという状況がある。したがって、この二つの点に関してあらかじめ検討しておく必要がある。

第一の点に関して。アウグスティヌスが聖餐論について体系的な考察を行っていないのは確かである。しかし、彼が聖餐について論じている箇所は多い。<sup>(2)</sup>実際、アウグスティヌスは聖餐の問題を『三位一体論』や『神の国』などの

アウグスティヌスの聖餐理解(宮谷)

神学的な名著のなかでも、『詩篇講解』や『ヨハネ福音書講解』などの注解書において、また、説教や書簡などのなかでもたびたび扱っている。それは聖餐が、アウグスティヌスの生涯において自由意思や恩恵の問題のように論争の主題とはなっていないが、また三位一体論のように古代教会において神学的な関心をあつめてはいなかったが、司教として教会を牧するうえできわめて重要な主題であったためにほかならない。したがって、当主題について言及するのは、聖餐を行う具体的な状況での場合が多いのは当然といえようし、また、神学的な思索を展開するというよりも、聖餐のもつ信仰的な意味の解明に主眼があるのも自然といえよう。<sup>(3)</sup>

例えば、アウグスティヌスが、レントの期間に教会に出席している会衆に対する説教のなかで、聖餐について述べている箇所がある。教会の状況とアウグスティヌスの態度を知る上で興味深く、また参考になるので、少し引用してみよう。

「聖なる福音書が読まれるのを聞いたように、主イエス・キリストは永遠の生命の約束のために、主の体を食し、その血を飲むようにすすめておられる。この言葉を聞いたあなたがたは、すべてがこれを理解しているわけではありたせん。……

主の肉を食し、その血を飲んでゐる者は、食べたり飲んだりしているものが何であるかを考えなさい。さもなければ、使徒が云っているように、自分の裁きのために飲食していることになります（一 コリント 一一、二九）。しかし、まだ食べたり、飲んだりしていない人は、急ぎなさい。今、そのような祭に招かれていますから。

最近では、政府が食料を供給しています。キリストは毎日の糧を与えてくれます。主の食卓は真ん中に置かれています。求道者のみなさん、あなたがたはこの食卓を見ながら、この祭に参加しないのは、何故ですか。おそらく、福

音書が読まれた時、あなたがたは自分の心の中で言ったのでしよう『主が、わたしの肉は真の食べ物、わたしの血は真の飲み物』(ヨハネ福音書 五、五六)といわれるとき、何を意味されているのだろう。どのようにして主の肉は食され、主の血は飲まれるのだろうか。主が意図されていることとは何であろうか。： あなたがたの体の耳は開かれています。何故なら、あなたがたは語られた言葉を聞いているからです。しかし、あなたがたの魂の耳は閉ざされています。何故なら、あなたがたは語られたことを理解していないからです。わたしは語りかけていますが、説明はいたしません。

ごらんなさい。復活節が近づいています。洗礼を志願しなさい。もし、祭がそのためのきっかけにならないなら、少なくとも、『わたしの肉を食し、わたしの血を飲むものは、わたしのうちにおり、わたしも彼のうちにいる』(ヨハネ福音書 六、五七)と語られている意味を理解しているかどうかに好奇心を抱きなさい。そうすれば、あなたがたはわたしと一緒にその意味が分かるでしょう。『叩きなさい、そうすれば開かれます』(マタイ七、七)。わたしが、『たたきなさい、そうすれば開かれます』とあなたがたに言うとき、わたしも叩いているのです。わたしに対して開きなさい。わたしがあなたがたの耳に語りかけるとき、わたしはあなたがたの心を叩いているのです。<sup>(4)</sup>

この例からも分かるように、アウグスティヌスは聖餐にふれるさいにも、必ずしもその意味について説明を加えず、また神学的な考察を行わない場合がある。<sup>(5)</sup>しかし、すでに述べたごとく、彼が聖餐に関して言及している箇所はかなりの多く、内容的にも興味深い論述もあるので、それらを手がかりにして、その聖餐理解を探ることは十分可能である。次に第二の点、アウグスティヌスの同じテキストから異なった解釈が導き出されるといふ問題は、特に、聖餐におけるパンと葡萄酒と、イエス・キリストの体と血の関係をめぐって最もはっきりしたかたちであらわれる。もっとも

これは、一般にテキストの解釈においては複数の解釈の可能性があるし、また聖餐論においてこの点は常に解釈の分かれるところであるので、特にアウグスティヌスの場合に限られていないともいえよう。しかし、アウグスティヌスの聖餐理解に関するテキストの解釈において、この点を問題として意識する必要があるのも事実である。それはこれが、例えば、アウグスティヌスの聖餐理解を实在説とるか象徴説とるかという、当主題をめぐる根本的な問題に関連してくるからであり、あるいはまた、アウグスティヌスの聖餐理解に犠牲説を認めるかどうかという論点にも関わるからである。

問題の所在を明確にするために、具体的なテキストを挙げて論じてみよう。

まず、はじめの实在説か象徴説かをめぐる論議でよく引照される箇所として、例えば、アウグスティヌスが四二二年ごろ、カルタゴで行った詩篇九八篇に基づく説教で、聖餐に言及している箇所がある。その中に次のような二種類の表現が見られる。

「キリストは肉を取られた。そして、彼はこの肉で地上を歩かれた。われわれの救いのために、その肉を食するよ  
うに与えられた。…」

…… 中略 ……

私が話したことを霊的に理解しなさい。あなたがたは、見える体を食べるものではありません。十字架上で流されたあの血を飲むではありません。私はあなたがたにサクラメントを勧めました。それを霊的に理解するなら、生かされます。目に見えるように祝われますが、霊的に理解しなければなりません。<sup>(6)</sup>

ローフスは、この説教の後半部分に注目し、イエスの存在を霊的なものとみなすのがアウグスティヌスの聖餐理解

であると主張する。その根拠として、この箇所のおすぐ後で、アウグスティヌスがヨハネ福音書第六章六三節にあるイエスの言葉「人を生かすのは霊であって、肉はなんの役にも立たない」を繰り返し引用していることを指摘する。<sup>(7)</sup>

これに対して、ポルタリエは象徴説をとるローフスを批判して、この説教の前半部分から全体を解釈しながら、実在説を唱える。その根拠として、初めの引用の少し前で、イエスの現実の「足跡」(scabellum; suppedaneum)に言及されていること、またアウグスティヌスがヨハネ福音書第六章五四節にあるイエスの言葉「わたしの肉を食べないものは、そのうちに永遠の生命を持たないであろう」を引用していることを挙げる。<sup>(8)</sup>

これが、アウグスティヌスのテキストの解釈にさいして、ファン・デル・ロフの表現によれば、実在説か象徴説かという「第一の緊張」として、争点になる問題である。<sup>(9)</sup>

もう一つ、アウグスティヌスの聖餐理解に犠牲説があるか否かに関わるテキストを取り上げてみよう。

アウグスティヌスは『神の国』のなかで、聖餐に言及して、次のように記している。

「多くの者がキリストにおいて一つの体であること、これがキリスト者の犠牲です。これを教会は祭壇のサクラメントにおいて繰り返し返しており、信徒に知らされているものです。ここでは教会が捧げるものにおいて、教会自体が捧げられていることが明らかにされているのです。<sup>(10)</sup>

この箇所についても、B・アルタナーやA・バルデイなどは、アウグスティヌスが聖餐を繰り返し返される犠牲と理解している典拠であるともみなすのに対して、ローフスやベーゼルクなどは、そのような犠牲説を支持するものではないと主張する。<sup>(15)</sup>

この二つの例からも分かるように、アウグスティヌスの聖餐に関するテキストの解釈は同一箇所から全く異なる結

論を導きだすような場合があるので、慎重な検討を必要とするといえよう。特に、中世期や宗教改革時代にみられたように、実在か象徴か、という二者択一的な視点のみからテキストの意味を探ることのないように留意すべきであろう。また、従来、カトリックの学者は実在説を取ろうとし、プロテスタントの人々は象徴説を支持するという傾向が見られたが、教派的な立場に囚われることのないようにすべきである。この関連で、カトリックの学者のなかにも、アルタナーのように、アウグスティヌスは実在説を排除しない象徴説である、と受け取ったり、<sup>(16)</sup> W・シモニスのように、どちらとも決めがたいと表明する者もみうけられるので、<sup>(17)</sup> 状況に変化が生じているものといえる。

しかしながら、現在でもなお、例えば、B・ローゼはその著『教理史』で象徴説であると記しており、<sup>(18)</sup> A・トラペは、J・クエスタンの『教父学』第四巻で、実在説であると主張しているの、<sup>(19)</sup> カトリックとプロテスタントの理解の相違は依然として解決をみない状況もある。<sup>(20)</sup> まさにそれゆえにこそ、宗教改革以来、異なった立場を取り続けてきた両者の間に聖餐をめぐるエキュメニカルな対話が、単に実際的な面からだけではなく、歴史的、神学的にも行われ出した今日、<sup>(21)</sup> 両者がともに優れた神学的遺産を残した人物として重視するアウグスティヌスの聖餐理解を取り上げることが意味があるといえよう。<sup>(22)</sup> ただ、われわれはあまり現代的な視点に拘ることなく、アウグスティヌスの聖餐に関するテキストを読み、そこにどのような聖餐理解が見られるのかを探り、その内容を明らかにするように努めてみたい。

## 二

アウグスティヌスによると、聖餐は重要なサクラメントの一つである。そこで、アウグスティヌスがサクラメント

をどのように理解していたかが問われなければならない。

アウグスティヌスは四一二年、カルタゴのマルケリヌスに宛てた手紙のなかで、サクラメントにふれ、それが救いを求め、献身するためになれわれにとつて必要だと述べたあとで、次のように説明している。

「神的な事柄に関する印は、サクラメントと呼ばれる」<sup>(23)</sup>

この箇所ではアウグスティヌスはサクラメントに関して二つのこと、つまり、サクラメントは「印」(signum)であること、それは「神的な事柄」(res divina)に関するものであること、を語っている。同様な見解は四〇〇年に執筆した『初心者の教導』のなかでも、<sup>(24)</sup>また、晩年の著作『神の国』のなかでも見受けられるので、<sup>(25)</sup>アウグスティヌスの基本的なサクラメント観を表すものとみなすことができる。

アウグスティヌスはサクラメントを印と呼んでいるが、それは何故か。それはアウグスティヌスの印理解と深く関連している。では印とは何か。印をアウグスティヌスはどのように理解しているのか。

アウグスティヌスは印を、自然的なものと意図的に作られたものとの二種類に分ける。<sup>(26)</sup>もちろん、ここでは後者の意図的に作られた印が問題である。この、「印とは他の何か或るものを指示するために用いられるもの」<sup>(27)</sup>であるから、印とは、その印自体とは異なる何か他の「もの」(res)を「指示する」(significare)ものである。したがって、印とは、それが何かそれ以外のものを指示する場合に、印とみなされ、また、それが指示するものが存在して、印としての意味をもちうるといえよう。さらに印についてアウグスティヌスは次のようにも言う「印とは、それが諸感覚にもちこむ像のほかには何かそれとは異なるものを、それ自身によって思惟の中へもたらすものである」<sup>(28)</sup>。印は、その印を見るものに、何かそれとは異なる他のものを指示するだけではなくて、その指示したものを、その印を見るものの思惟

のなかにもたらすものである、とアウグスティヌスは考えている。つまり、アウグスティヌスによると、印とは、印を見るものと、印が指示するものとを結び付けるものである。

では、サクラメントが印と呼ばれる場合、その印は、何を指示するのであろうか。アウグスティヌスによると、それは「神的事柄」である。それゆえこれは、「神的事柄の印」とか「聖なる印」とも呼ばれることもある。神的事柄とは、まず、「目でみられるものとは別なもの」<sup>(31)</sup>であり、それは「直観されるもの」<sup>(32)</sup>である。印としてのサクラメントは、アウグスティヌスによると、「可視的な面と不可視的な面という二要素を備えていることになる。印としてのサクラメントが、不可視的で、直観される神的事柄を指示するがゆえに、「秘義」(mysterium)と呼ばれる訳である。<sup>(33)</sup>もっとも、サクラメントというラテン語は、語源的にはギリシャ語の *μυστήριον* に由来するが、<sup>(34)</sup>ここでは単に語源的な関連性の問題だけではなくて、サクラメントが神的事柄を指示する印であるがゆえに、内容とその意義において文字どおり「秘義」とみなされている点が重要である。

アウグスティヌスによると、サクラメントは、物的なものによって霊的なものを、地上的なものによって天上的なものを、感覚的なものによって英知的なものを、可視的なものによって不可視的なものを指示し、つまり、その印とは異なる他のもの、神的事柄を指示し、しかもまた、その神秘的な事柄とその印を見るものとを結び付けるゆえに、印であり、かつ「秘義」である。

アウグスティヌスは聖餐のサクラメントを「主の食卓のサクラメント」と呼ぶ。<sup>(35)</sup>このサクラメントが主の食卓にふさわしい印として成り立つためには二つの要素がある。まず、それは「パン」と「葡萄酒」という「物素(要素)」(elementum)である。しかし、パンと葡萄酒という要素が、サクラメントとして機能する、つまり、神的事柄を



指示するためには、このままでは不可能である。そこでアウグスティヌスは「物素に言葉を加えなさい。そうすればそれはサクラメントになる」<sup>(36)</sup>という。パンと葡萄酒が聖餐のサクラメントになるには、その物素に言葉を関係させることが必要だ、とアウグスティヌスは考える。この言葉がサクラメントを成立させる二番目の要素である。つまり、言葉が、聖餐の物素を印にする。言い換えれば、物素は言葉によって、それが何を指示し、何に関わるかが明らかにされ、しかも、その指示するものが神的名のものであるゆえに、サクラメントになる。

この場合の言葉とは、一般には、聖餐の制定の辞を意味すると受けとれる。<sup>(37)</sup>つまり、イエスがパンと葡萄酒に関連して「これはわたしのからだである」と「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である」といわれた言葉をさす。これは「キリストの言葉」(verbum Christi)である。この言葉が語られると、パンと葡萄酒という二つの物素はイエス・キリストの体と血という神的名ものを指し示す印の作用をし、アウグスティヌスの考えるサクラメントと呼ばれるにふさわしいものになる。

このように、物素に言葉が加えられると、それはサクラメントになり、また、その言葉によって印であるサクラメントが指示するものが明確になる。しかし、これで聖餐の意味が本来に明確になったといえるのであろうか。特に、物素とイエスの関係について、この場合、アウグスティヌスはどのように理解しているのであるうか。上記の引用文で、サクラメントに加えられる言葉が制定の辞をさすとしても、実はこの制定の辞自体がまさに言葉であるゆえに、問題が残るのである。言葉は、アウグスティヌスによると、印である。<sup>(38)</sup>言葉は何かを指示したり、表現したり、伝達するために意図的に作られたものだからである。それゆえ、印としての言葉は、何か他のものを指示する。そこで、制定の辞の言葉が、イエス・キリストの体と血を指示する印であると解釈すれば、物素とイエスの関係は象徴的なも

のとなる。あるいは、この言葉が、イエスの語られた言葉そのものを指す、とアウグスティヌスが考えていたとすれば、物素はイエスの約束を意味することになり、イエスの体と血による契約と関係づけられる。あるいはまた、イエスの言葉が逆に物素を指示し、体と血をパンと葡萄酒に結びつけるとみなせば、實在説になる可能性もある。

いずれにしろ、上記の物素に加えられる言葉を制定の辞であるとのみみなしてしまうといくつかの解釈の可能性があり、アウグスティヌスの聖餐理解が必ずしも明確にならない。つまり、アウグスティヌスの聖餐理解の問題というよりも、制定の辞をどう解釈するか、という問題になってしまふからである。従来のアウグスティヌス解釈の問題はこの点に気づかなかつたゆえに混乱をきたしていたといえよう。

では、われわれはどのように解釈したらいいのであろうか。

まず、われわれはこの言葉を、アウグスティヌスが制定の辞とのみ受け取らず、イエス自身ともみなしていたと考える。この言葉は「キリストの言葉」をさすのみではなく、「言葉なるキリスト」(Verbum Christus)をも指すといえよう。<sup>(39)</sup>イエスは神の言葉である。この意味で、言葉とはまさにイエス自身にはかならない。アウグスティヌスが「物素に言葉を加えなさい。そうすればそれはサクラメントになる。」というとき、それは「物素にイエス・キリストを加えなさい。そうすればそれはサクラメントになる。」という意味も含んでいるのである。

では、言葉がイエス・キリストであるとはどういうことか。イエスは受肉し、受難した神の言葉である。物素がこの言葉、イエス・キリストの存在、その生涯と業とに結び付くときに、それは神的なものに関わり、確かにサクラメントになる。受難し、昇天したイエス・キリストは霊的な存在である。このイエス・キリストに聖餐は関わる。目に見える物業が目に見えない言葉であるイエス・キリストの實在を指示する。この意味で、イエス・キリストはサクラ

メントにおいてその存在が指示されているのである。この関連で、アウグスティヌスが霊的なものを真の実在とみなしていたことを指摘したい。つまり、アウグスティヌスによると、イエスは聖餐において霊的に存在することになる。そして、霊的な存在こそ真の存在である。ただ、このことから、パンと葡萄酒がイエス・キリストの体と血であるとか、この両物素のなかにイエス・キリストが実在するとかは、主張できない。また、言葉を加えるときに、物素がイエス・キリストに変わる、という考えもアウグスティヌスにはない。物素は、言葉によって、イエス・キリストが真に実在することを指示する印、つまり、サクラメントになる。アウグスティヌスによると、物素は目に見える言葉 (visible verbum) であり、そしてそれは目に見えない言葉 (invisible verbum) なるイエス・キリストを指し示すのである。<sup>(40)</sup>

次に、言葉がイエスであるとは、イエスが何か他のものを指示する印であることも意味する。イエスは神の言葉であるゆえに、イエスは神を指し示す。彼は、神の人間に対する愛と救いが現実になったことを示す。このように聖餐におけるパンと葡萄酒という物素は、イエス・キリストの言葉が加えられると、言葉なるイエス・キリストの業と彼において成された、神の愛と救いという神的事実がらを指し示すがゆえに、サクラメントとなる。これが、アウグスティヌスの基本的な聖餐理解であるといえよう。

### 三

パンと葡萄酒という物素に神の言葉なるイエス・キリストを関連づけたサクラメントにわれわれが与るとは、どういふことであろうか。聖餐がイエス・キリストの存在を指示しているとすれば、彼とパンと葡萄酒の関係はどのよう

なものであろうか。これが次に探究さるべき問題である。

アウグスティヌスは聖餐の sacrament に与ることを説教のなかで次のように説明している。

「あなたがたは、見える体を食べるものではありません。十字架上で流されたあの血を飲むではありません。わたしはあなたがたに sacrament を勧めました。それを霊的に理解するならば生かされます。目に見えるように祝われませんが、霊的に理解しなければなりません。」<sup>(41)</sup>

イエスの聖餐における存在が霊的なものであるゆえに、アウグスティヌスによると、それへの関与のしかたも霊的なものであると、考えられている。では、イエスの体と血を霊的に食べたり、飲んだりするとはどういうことであろうか。

ここでアウグスティヌスが sacrament の執行ないしはそれへの関与と、 sacrament の効力を区別する見解を有していることを思いおこしたい。彼は言う「 sacrament とその効力とは別である。」<sup>(42)</sup>これはアウグスティヌスの聖餐理解にとって基本的な命題の一つである。したがってわれわれはこの表現の意味を詳しく考察してみることにしよう。

sacrament とはアウグスティヌスによるとすでに見たごとく、神的なものを指示する印であり、それは聖餐の場合、イエス自身を、またイエスにおいて示された神の救いの業を指す。ではこの sacrament の効力とは何か。つまり、聖餐のパンと葡萄酒がイエス・キリストの体と血を指示するということはいかなる意味と効力をもつか、あるいは、聖餐に与り、パンと葡萄酒を受けるものは、それによって指示されているイエス・キリストとどのような関係をもつことになるのか、という問題である。

アウグスティヌスは四一〇年ごろ、復活祭におこなったある説教のなかで、聖餐のサクラメントについてかなり詳しく説明している。

「今、あなたがたが神の祭壇の上に見ているものは、昨夜もそこで見たものです。しかしあなたがたは、それが何であり、またそれが何を意味しているか、つまり、サクラメントがどのように偉大な実在であるかを、まだ聞いてはいません。」

さて、あなたがたが見ているものは、パンと葡萄酒です。これが、あなたがたの目があなたがたに伝達しているものです。しかし、あなたがたの信仰は、このパンがキリストの体であり、この杯がキリストの血であることを教えられる必要があります。おそらく、この簡単な表現で信仰にとっては十分かもしれません。<sup>(43)</sup>

ここでアウグスティヌスは聖餐の物素であるパンと葡萄酒がキリストの体と血であることを教える必要があること、そして、それは信仰の問題にかかわること、を述べている。先に、アウグスティヌスが、物素に言葉が加えられるとサクラメントになる、と考えていることに言及した。そのさい、明らかにしたように、パンと葡萄酒をキリストの体と血に結びつけるのは言葉であった。それ故、言葉が信仰に関わるのであるが、言葉と信仰はどのような関係にあるのであろうか。

アウグスティヌスによると、言葉とは音 (sonus) であり、声 (vox) であるから、それは先ず聞かれるものである。<sup>(44)</sup>そして、この言葉がキリストの言葉であるなら、その言葉は聞かれるだけではなく、信じられ、受け入れられるものである。つまり、そこで語られる「これはわたしの体」「これはわたしの血」という言葉は、それを聞くものにイエス・キリストに対する信仰を要請しているのである。キリストの言葉を聞いて、信じる、これが信仰である。信仰は聞

くことから来るからである。この意味で、聖餐において、物素にキリストの言葉が加えられ、それを受けるとは、その語られる言葉を聞いて信じる態度の表明にほかならない。これがまず、サクラメントに関わる者にとって基本的な点であり、またサクラメントの大切な意味でもある。

さらに、聖餐において言葉と信仰の関係が問題になるのは、物素に加えられる言葉が、言葉なるイエス・キリストを指示しているからである。その指示された言葉なるイエス・キリストとは受肉し、受難し、復活し、昇天した言葉 (Verbum Christus incarnatus, passus, resurrectus) なるイエス・キリストをさし、それはまた彼において成された神の救いの業を意味する。したがって、これに与り、これを受けるとはすでになされた神の業、成就した言葉 (verbum factum) に対する信仰告白を意味するといえよう。アウグスティヌスは、これをローマ書十章九—十節の信仰告白と言葉の関係として捉えている。<sup>(45)</sup>

以上をまとめると、聖餐に与るとは、まず、そこで語られるキリストの言葉を聞いて信じること、次に、物素と信仰によって指示される言葉なるイエス・キリスト、すでにわざを成した言葉にたいする信仰を告白することである。この言葉を信じさせ、救いを確信させるのが、神の業であり、それは神の恵みの力、聖霊の働きである。そして、これがサクラメントの効力の一つでもある。

サクラメントにおける言葉と信仰の関係、聖餐の意味およびその効力については、アウグスティヌスによると、以上で十分である。しかし、彼は同じ説教のなかで、さらに話を続けて、聖餐理解を展開している。彼は言う。

「しかし、信仰は教えを求めます。予言者が記しているとおりです。『あなたがたは信じなければ、知解(直観)しないでしょう』(イサヤ 七、九)。ですから、あなたがたはわたしに言います。『あなたはわたしたちに信じることを

教えてくれた。そこで、知解するように説明してくれ』と。<sup>(46)</sup>

ここでアウグスティヌスは、イエスの誕生から、昇天までを簡単に辿っていき、さらに説明を続ける。

「今、主イエス・キリストは天で、父の右に座している。ではどうして彼の体がパンなのでしょう。杯とは何でしょう。杯のなかに何があるのでしょう。彼の血とはどのようなものでしょうか。

みなさん、これらのものはサクラメントと呼ばれます。それは、それらのものの中に一つの物が見えますが、しかし、別なものが直観されるからです。見える物は物體的な形姿をしています。理解されるものは霊的な果実です。そこで、もし、あなたがたがキリストの体を直観したいと望むなら、使徒が信徒に語っていることを聞きなさい。『あなたがたはキリストの体であり、その肢体である』(一コリント 一二、一七)。ですから、もし、あなたがたがキリストの体であり、その肢体であるなら、あなたがたの秘義 (mysterium) が主の食卓に置かれているのです。あなたがたは、自分たちの秘義を受けているのです。あなたがたがそうであるものにアーメンと答えなさい。答えることによって、それに同意するのです。あなたがたは『キリストのからだ』と聞きます。アーメンと答えなさい。キリストの体の肢体でありなさい。そうすればあなたがたのアーメンは真実となります。<sup>(47)</sup>

信仰によって、パンをそれが指示するイエス・キリストの体として受けとめることは、それを受ける者自身がイエス・キリストの体であると信じることである、とアウグスティヌスは考えている。聖餐に与る者、パンを食する者は、イエス・キリストの体を食するものであり、イエス・キリストの体を食する者はイエスの体である。そして、これこそ秘義であり、サクラメントとの意味である。アウグスティヌスは同じ頃、復活祭でおこなった説教のなかでも同様な見解を表明している。

「これは、大きな、実に大きな秘義 (mysterium) です。あなたがたはこれに秘められている重要さを知りたいと思いますか。『ふさわしくないまままでパンを食し主の杯をのむものは、主の体と血を犯すものである』(一コリント一一、二七) ふさわしくないまま受けるとはどういうことでしょうか。不真面目に受けることです。侮って受けることです。次のことはあなたがたにもよく分かると思います。あなたがたが見ているものは一時的で消え去りますが、しかし、そこで指示されている不可視的な存在は永遠に留まります。確かに、受け取られ、食され、消滅します。しかし、キリストの体が消滅するでしょうか。キリストの教会が消滅するでしょうか。キリストの肢体が消滅するでしょうか。いいえ、決してそうではありません。<sup>(48)</sup>」

これらの説教の内容から、アウグスティヌスの聖餐理解がさらに明らかになったといえよう。アウグスティヌスによると、物素は印であって、他のものを指示する役目を果たすだけであり、したがって、その印である物素がそれが指示するものへ変化したり、とって変わったりすることはない。感覚に訴える物素は、可視的で、一時的で、消滅する存在である。しかし、その印が指示するものは、神的なものである故に、不可視的で、消滅することはなく、永遠にとどまる。物素としてのパンは食され、消滅する。しかし、パンが指し示すキリストの体とキリストの体なる教会、およびその体の肢体なるキリスト者は消滅することなく、永遠に存在し続ける。ここでは、印としての物素とそれが指示するものとの違いが明確にされている。また、アウグスティヌスにおいてはパンと葡萄酒という物素がキリストの体と血に変わるとか、あるいは、両者とキリストが同じである、というようなことが問題にならないことも当然といえよう。彼は、物素とキリストの関係がどのようなものかを、印と印によって指示されているものという関係以上に、関心を抱いたり、詮索したりしないのである。



アウグスティヌスによると、聖餐を受けるとは、物素が指示するイエス・キリストの体と関わること、彼の体の肢体となることを意味する。聖餐の可視的な物素、不可視的なものを指示する印をとおして、信徒が神の言葉、目に見えない霊的な実在であるイエス・キリストの体を示され、それを受け取り、食することにより、そのキリストの体に自らが属しているという秘義を確信するのである。

アウグスティヌスはパンと葡萄酒を受けることと、イエス・キリストの体を食し、血を飲むことと、彼の体であることとを、同じ事態を指すものと理解し、しかも、これを聖餐のサクラメントにとり根本的な意義とみなし、繰り返し強調する。では、聖餐にとり、ひとが自らキリストの体であるという秘義に与るとは、どういうことであろうか。

アウグスティヌスは『神の国』の中で言う「キリストの体の中にいるものは、また、その肢体であるものは、本当にキリストの体を食べ、またキリストの血を飲むものである。」<sup>49</sup> また、『ヨハネ福音書注解』のなかでも、キリストの言葉の引用によって同じことを主張している。「わたしの体を食べ、わたしの血を飲むものは、わたしの内に留まり、わたしもその人のうちに留まる」<sup>50</sup>。

これが、アウグスティヌスの考えている聖餐のサクラメントの効力であり、また、最も中心なことでもある。つまり、聖餐において、信仰者はキリストと内的で人格的な交わりないしは生きた交流をもつのである。これを可能にし、実現し、確認させるのが聖餐の効力にはかならない。

#### 四

アウグスティヌスが聖餐における参与者とキリストとの関係を、キリストの体という意味で結び付け、重視してい

ることをみてきた。では、キリストの体であること、また、キリストのうちに留まり、キリストと交わりをもつとは、どういう意味であろうか。これがキリストの体なる教会の中に留まることを意味しているのは確かである。しかし、アウグスティヌスは、何故聖餐のサクラメントによって、キリストの体に留まることを主張するのであるか。また、何故、パンと葡萄酒なのであるか。これらの物素は単なる印で、それ自体は何ら意味をもたないのであるか。

先に引用した説教のなかでアウグスティヌスはこの点にふれ、次のように述べている。

「何故パンなのでしょう。これについてはわたしは説明いたしません。むしろ、使徒の語ることを一緒に聞いてみましょう。彼はこのサクラメントについて次のように語っています。『パンが一つであるから、わたしたちは多くても一つの体である』(一コリント 一〇、一七)」<sup>(51)</sup>

アウグスティヌスは聖餐において、パンと葡萄酒で表されるキリストの体とわれわれがキリストの体であることを説明するさいに、コリント人への第一の手紙十章十七節をしばしば引照する。<sup>(52)</sup>つまり、使徒パウロの「パンが一つであるから、わたしたちは多くても、一つの体である」という言葉によって、キリストの体であることの意味を明らかに出来ると、彼は考えている。アウグスティヌスはさらに言う。

「一つのパンと、使徒は言っています。多くのパンが彼のまえにそこで置かれていたとしても、さしつかえありません。それはただ一つのパンなのです。今日、世界中にどんなに多くのパンがキリストの祭壇に置かれていたとしても、問題ではありません。それは一つのパンなのです。使徒はそれを簡潔に説明しています。『わたしたちは多くても、一つの体である』。このパンがキリストの体です。使徒がこれに関して次のように言うとき、それは教会をさします。『あなたがたはキリストの体であり、ひとりびとりはその肢体である』(一コリント 一二、一二七)。あなたがたがうける

もの、それはあなたがた自身なのです。それは恵みによります。恵みによってあなたがたは償なわれたのです。……あなたがたがここで見ているものは、一致の sacrament です。<sup>(53)</sup>

アウグスティヌスがキリストの体によって教会を念頭においていたことは疑いえないであろう。しかし、彼の解釈の強調点が、パンが一つであることに置かれていることは上の引用から確かであり、また、注目にあたいるといえよう。教会とは一人のキリストを頭とするものたちの集団である故に、一つの体であり、また、教会はキリストの体として一つであり、さらに、キリスト者はキリストの体の肢体として一つの体を構成しているのである。この意味で、一つであることは、重要な意味をもつのである。

上に引用した説教のなかで、アウグスティヌスは聖餐を「一致の sacrament」と呼んでいる。<sup>(54)</sup> 同じく聖餐との関連で、コリント人への第一の手紙十章十七節を引用した後で、アウグスティヌスは「このパンで使徒はあなたがたが一致を愛すべきであることを印象づけようとしている」<sup>(55)</sup> とか、「理解し、喜びなさい。一致、真実、敬虔、愛。一つのパン、この一つのパンとは何でしょうか。多くいても、一つの体という意味です」<sup>(56)</sup> と解釈をしている。パンがキリストの体を指示し、キリストのからだだがパンを食するもの自体をさすとアウグスティヌスが考えるとき、それは外的で、制度的な教会の一体性をさすと同時に、そこに関わる人間そのものを指していることは明らかであり、そのさい、特に、パンが一つであることが繰り返し語られるので、キリスト者の一致、人間の一致、集団の一体性に最大の関心が向けられている。この意味で一個の塊であるパンが統一性をもった体の「似姿」(figura)であり、また、ともにまとまりのあるパンと人間の体のあいだに「類似性」(similitudo)が認められることが分かる。<sup>(57)</sup>

このことをアウグスティヌスは、物素であるパンと葡萄酒そのものの実際的な性格を手掛かりにして、説明し、明

瞭にし、印象づけようと試みる。つまり、彼は、パンと葡萄酒がどのようにして製造されるか、その過程に注意を向けさせ、類似性を思慮するように促す。パンは沢山の麦の粒が集められ、粉にされ、水が加えられ湿らされ、混ぜ合わされ、火によって焼かれ、一つのまとまりを持つ塊まりとしてパンになる。葡萄酒は、多くのぶどうの粒が集められ、潰され、混ぜ合わされ、液体としてまとめられて作られたものである。このようにアウグスティヌスは、パンと葡萄酒の現実の製造過程に象徴的な意味を見出しながら、両物素を用いる聖餐のサクラメントの特色と意義を明らかにする。<sup>(58)</sup>そこで「このように、パンと葡萄酒の両方のなかに、一致のサクラメントが存在している」<sup>(59)</sup>ので「主の食卓は平和と一致の秘義」<sup>(60)</sup>であると、アウグスティヌスは言う。

このことから分かるように、聖餐は、パンと葡萄酒という両物素自体が類比的に示しているように、多くのものを一つにする秘義である。そしてこの秘義を成り立たせるのがイエス・キリストの体と血である。そして、この秘義を成立させるキリストの体と血はそれを受けるものに働きかけ、彼らのなかに一致を創り出す。これがサクラメントにおける恵みの力である。逆に言えば、一致がないならば、それはキリストの体ではないことであり、かつそれは聖餐でイエスの体と血を受けないこと、パンと葡萄酒の意味を解さないこと、恵みの力を受けないなら、サクラメントの効力を知らないことになるのである。一致が実現すること、恵みの力を受けること、これが聖餐の効力である。聖餐のサクラメントは外的に施行されるが、もし、それに参与する者に一致が欠けるなら、効力を持たない。アウグスティヌスが「サクラメントとその効力は別である」という表現で意図していることはこの事態を指すといえよう。<sup>(61)</sup>

この意味で、聖餐におけるキリストの体と血は、すでに救いの業をなした存在として信仰において記憶されるだけではなくて、聖餐にあずかるものに人格的に関わり、そこに一致を創り出す存在である。アウグスティヌスは、受肉

し、受難し、復活した言葉としてのイエス・キリスト、つまり、救い主として信じられ、記憶されるイエス・キリストと、一致を創り出す言葉 (Verbum faciens) としてのイエス・キリストが聖餐において意味をもち、また、効力をもつと考えている。<sup>(62)</sup>

## 五

今まで見てきたアウグスティヌスの聖餐理解において、パンと葡萄酒をイエス・キリストの体と血に関わらせながらも、その受難や償罪という面にはほとんど注意を向けない点がわれわれの注意をひく。そこで、アウグスティヌスの聖餐理解には、犠牲という視点が欠如しているとの印象を受けるのである。

アウグスティヌスの聖餐論で、それが犠牲説を含むかどうかが議論されていることは、はじめに言及したとおりである。最近でも、アルタナー、バルデイ、トラペなど、カトリックの優れた教父学者が、アウグスティヌスに犠牲説がある、と主張している。<sup>(63)</sup> はたしてそうであろうか。簡単にこの問題を取り上げてみたい。

犠牲説の典拠としては、『神の国』のなかから、十卷六章、十卷二十章などが挙げられる。確かに、これらの箇所では聖餐との関連で犠牲 (sacrificium) の問題が論じられている。しかし、聖餐を行う度にキリストの犠牲が繰り返される。そのため聖餐に与り、パンと葡萄酒を受けることによって、罪が許される、という解釈をとることは困難である。このことは、テキスト自体によって明白である。

「多くのものがキリストにおいて一つの体であること、これがキリスト者の犠牲である。これを教会は祭壇のサクラメントにおいて繰り返している。」<sup>(64)</sup>

アウグスティヌスの聖餐理解 (宮谷)

アウグスティヌスが聖餐と犠牲の関係について言わんとしていることの要点がここにははっきりと示されている。

この箇所での犠牲はキリストの贖罪の犠牲ではない。また、教会がイエス・キリストを犠牲として捧げることでもない。イエス・キリストが自らを人々のために犠牲として捧げ、多くのひとの罪を許し、愛によって一つとされたように、聖餐に与るものは、このキリストにあって一致し、一体となることが勧められている。したがって、聖餐はキリストの犠牲を意味するよりも、それに与るものが自らを犠牲として捧げることである。ここでの犠牲は、キリストの体として、他のひとびとと一体となり、一致を実現し保持すること、そのような器となるように自らを犠牲として神に捧げるという意味に解すべきである。これは、アウグスティヌスがローマ人への手紙十二章一節以下を引用して、犠牲を勧めていることから裏づけられる。<sup>(65)</sup> 彼は、聖餐にあずかるものは、自らを神に喜ばれる供えものとして捧げるために、魂も体も神に向け、この世から離れ、神によって自己形成するほど神に従う生きかたをする。これがキリスト者のささぐべき犠牲だという。アウグスティヌスによれば、教会も聖餐を行うごとに、自らを神に捧げるべきであると、勧められている。

このようにアウグスティヌスは、イエスの犠牲の繰り返しを語らず、むしろ、信徒の神への献身を強調する。それは、彼が聖餐におけるイエス・キリストを犠牲そのものとして見ずに、犠牲の模範 (exemplum) と受け取っているからである。<sup>(66)</sup> アウグスティヌスによると、聖餐とは、人々を愛し、人々のために自己を捧げて死なれたイエス・キリストを記憶し、その彼を新たに模範として受け取るために、行なわれるサクラメントである。聖餐においてこのような態度でイエス・キリストを受け入れるために必要なのが信仰にほかならない。それ故、アウグスティヌスは、この関連でも、聖餐に与るさいに信仰が重要であると強調する。信仰がなければ、パンと葡萄酒の指示するものも、イエ

ス・キリストの体と血の意味も、またそれと自分自身の関係も理解出来ないからである。聖餐が「信仰のサクラメント」と呼ばれる理由がここでも明らかであるといえよう。<sup>(67)</sup>そして、信仰をもって聖餐に与るものは、キリストの体であることを確信し、キリストの内に留まる。キリストとの交わりを持つものは、他者との平和、一致、愛による交わりをキリストによって与えられると同時に、自らもそれを創り出すべく励む。これが聖餐の意味であり、また、効力である。

聖餐のこのような意味を知り、味わい、またこの効力を受け、体験するものは、キリストを模範として一致と愛の交わりを創り出すために、自らを神に捧げる。これがアウグスティヌスの聖餐理解であり、聖餐において示され、勧められている犠牲である。

## 六

最後に、以上の論述をもとにして、アウグスティヌスの聖餐理解をまとめ、その特色と意義について簡単に考えてみたい。

一、アウグスティヌスは、サクラメントは印である、という立場から、聖餐における物素をイエス・キリストの体と血を指す印とみなす。すでにここに、アウグスティヌスの聖餐理解の特色と意義がみとめられる。<sup>(68)</sup>一般に聖餐論においては、パンと葡萄酒をイエス・キリストにどのように関わらせるかが、困難な課題である。これは、たとえば、中世期に、実体変化説、象徴説、实在説などが出てきて、激しく議論されたことから分かる。<sup>(69)</sup>アウグスティヌスは物素を印とみなすことにより、両者の関係を明確にした。そのため、物の神化も、キリストの物体化も避け得たのみ

ならず、両者の存在様式とその関係および意味を適切に説明しえた。

これはアウグスティヌスの存在に対する考え方と存在の認識の仕方と密接に関わっている。まず、プラトン主義の影響をうけているアウグスティヌスにとって、存在するものは物的、感覚的なものと、霊的、英知的なものに分かれる。そして、霊的なものが真の実在である。次にアウグスティヌスはものを、使用 (uti) の対象と享受 (frui) の対象にわけ、使用の対象となるものは、何か別なもののために使用され、享受の対象となるものは、それ自体のために受け入れられ、楽しまれる。また、使用の対象となるものは、享受の対象となるものへと至らせるために、存在し、使用される。<sup>(70)</sup>

アウグスティヌスにとり、物素は可視的な物体であり、イエス・キリストは不可視的な霊的存在である。印は感覚で捉えられるもので、印の指示するものは霊的に直観されるものである。さらに、物素は使用の対象であるが、イエス・キリストは享受の対象である。アウグスティヌスにとっては、言うまでもなく、使用の対象である印を通して享受の対象であるイエス・キリストへ至り、キリストと関わるのが大切である。したがって、彼の場合、物素がどのようなにしてイエス・キリストになるかということは、全く問題にならなかつたわけである。この点で、物素がイエスに移り変っていくことのなかに聖餐の秘義を見ようとしたアンブロシウスの聖餐理解とは非常に異なると言えよう。<sup>(71)</sup>

二、人間は被造物として被造物の世界に、つまり、感覚的、物的な世界に住んでいる。そこで創造主なる神へ至るには、被造物を、感覚的なものを手掛かりにしていかざるをえない。これが、印から神的なものへいたる道である。アウグスティヌスがものは印によって学ばれる、というのもこの意味においてである。<sup>(72)</sup>したがって、神へいたるには、この世で何らかの印を必要とする。問題は印だけによって、ものに、特に神的なものに到達できるかどうかである。



アウグスティヌスは神的なものを学ぶには、神のほうからの働きかけが要る、と考える。

聖餐の物素からだけでは、神的なものへ到達することは出来ない。神からの働きかけとしてのイエス・キリストが存在するのはこのためである。かれは、神の言葉として人間のところにきた神的なものである。可視的な物素にこの不可視的な神の言葉が加わると、それは神と人間を関係づける sacrament となる。それ故アウグスティヌスにとっては、物素を感覚的に受けるよりも、また、パンと葡萄酒とイエス・キリストの体と血の関係がどうであるかということよりも、そこで語られる言葉、および物素が指示する言葉そのものであるイエス・キリストをどう受けとめるか、まさに自分自身とイエス・キリストとの関係、つまり、信仰が重要である。これを成立させるのがイエス・キリストの体と血、神によって成し遂げられた救いの業である。聖餐はこれを示す。聖餐においてイエス・キリストの体と血を指示するパンと葡萄酒を受ける時に、この救いが想起される。アウグスティヌスによると記憶とは過去の現在化である。したがって、イエス・キリストにおいて成し遂げられた救いを想起するとは、その救いを現在のものとして味わうために外ならない。

そのため聖餐では、イエス・キリストが自分の中に今、実在し、また、自分が彼の中に実在するかどうか、イエス・キリストとの生きた関わりがあるかどうか、が問われるのである。この意味でアウグスティヌスの聖餐理解においては、一方では、人間とイエス・キリストの関係を成立させ、維持させる信仰、彼との人格的な交わりが重視されており、同時に他方では、このイエス・キリストとの関係が他者との愛の関係を成立させる力として作用し、その効力の確認と実現は他者との一致の成立によって証明される。

三、アウグスティヌスは聖餐において、パンと葡萄酒を受ける者がイエス・キリストの体に関わることを強調する。

ここでは信徒がキリストの体なる教会の肢体であることの自覚と自らがキリストの体であるべきことが意味されている。体とは人間が生を営んでいくための基盤である。教会はキリスト者が信仰生活をおくるための基盤である。この意味で、イエス・キリストが教会の基盤であり、また、キリスト者の生の基盤である。

聖餐で確認されるこのことが現実に意味をもつのは、教会が、また、キリスト者が自らキリストの体として、キリスト御自身が生きられたと同じように生をおくる場合である。したがって聖餐においては、教会とキリスト者が真にキリストの体であるかどうか、キリストの体を基盤としているかどうか、キリストと同様に生きているかどうかが問われているのである。アウグスティヌスが偉大な秘義と呼ぶ、キリストの体を食する者がキリストの体であるという聖餐理解の背後には、彼のキリスト論があるとみなしうる。アウグスティヌスのキリスト論の特色の一つは、「キリストのすべて」(totus Christus)にキリスト者を関わらせる点にある。<sup>(73)</sup>つまり、キリスト者がキリストの全てを受け入れ、全てを模倣し、全ての点で彼と同じように生きることの重視である。他者のために自らの全てを捧げ愛に生きること、これが聖餐における犠牲の意味であり、「体を神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として捧げる」(ローマ書一二、一)ことにほかならない。

アウグスティヌスにおいては、いわゆるサクラメントを成立させる三要素の一つ、その施行者の存在と職務はあまり重視されていないとの印象を受ける。これは、今まで述べてきたごとく、聖餐において重要なのは、イエス・キリストの犠牲を繰り返すし、それによって罪の許しを説くことではなくて、聖餐に与る者自身がキリストの体としてキリストと同じく愛に生きるために自らを神に捧げることである。この点に、われわれはアウグスティヌスの聖餐理解の特色と意義を認めることができる。また、この意味で、アウグスティヌスの聖餐理解は、サクラメントにおける司教

の存在と職務を重視し、キリストの犠牲説をとるキプリアヌスの立場とは非常に異なっている、<sup>(74)</sup>と言えよう。

以上見てきたように、アウグスティヌスの聖餐理解においては、パンと葡萄酒とイエス・キリストとの関係、制定の辞の解釈などはあまり関心の対象とならず、むしろ、人間とイエス・キリストとの関係、特に、 sacrament に与る者がキリストの体であること、そして、これは一致の現実によって明らかに示される点が強調されている。ここで強調されている「一致の sacrament」という聖餐の基本的な意義と効力が、彼以後の歴史においては認識されることはあったが、<sup>(75)</sup>現実にはむしろ逆に、中世期でも、宗教改革時代でも、聖餐理解の問題自体がしばしば分裂、対立を産みだすものとして作用したことは遺憾である。この意味で、聖餐をめぐるエキュメニカルな対話と研究が盛んになっている今日、アウグスティヌスの聖餐理解は貴重な示唆を与えてくれるのではなからうか。

#### 注

本注において使用したアウグスティヌスの著作の主な校訂本の略号は次のとおりである。なお彼の著作名の略記は慣例に従った。

- CCL: Corpus Christianorum, Series Latina, Turnhout 1954ff.  
CSEL: Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum, Wien 1887ff.  
MA: Miscellanea Agostiana. Testi e studi pubblicati a cura dell'ordine eremitano di s. Agostino nel XV centenario dalla morte del santo dottore 1-2, Roma, 1930-1931.  
PL: Patrologiae cursus completus. Series latina. Accurante J.-P. Migne, Paris 1841-1849.  
BA: Bibliothèque augustinienne. Œuvres de saint Augustin, Paris 1947ff.  
BEN: Augustini opera omnia, studio monachorum ordinis s. Benedictini, apud Gaume fratres, 11 vol., Paris 1836-1838.

SC: Sources chrétiennes, Paris 1942ff.

- (1) 例えば、英国の J. N. D. Kelly, *Early Christian Doctrines*, London 1960, p. 446; "His (Augustin's) thought about the eucharist, unsystematic and many-sided as it is, is tantalizingly difficult to assess." がこの事態をよく言い表している。聖餐の問題をキリスト教史全体にわたり詳しく論述しているライッンのフェルトは、アウグスティヌスの聖餐理解について次のように記している。H. Feld, *Das Verständnis des Abendmahls*, Darmstadt 1976, p. 90: "Nicht geringe Schwierigkeit bietet die Abendmahlsaufassung des Augustinus für eine moderne Deutung." また、ライッンス人のサーミンも同様な問題性を指摘している。A. Sage, *L'Eucharistie dans la pensée de s. Augustin*, in: *Revue des Études Augustiniennes* 15, 1969, p. 209: "On continue à juxtaposer à des textes réalistes d'autres textes dits symbolistes, aussi appuyés, peut-être même davantage, ..." (2) アウグスティヌスの全著作における sacramentum の用法と使用頻度を調べた C・クーアウリェルは、聖餐という意味の場合が二三箇所ある。C. Couturier, *Sacramentum et mysterium dans l'œuvre de saint Augustin*, in: *Études Augustiniennes*, Paris 1953, p. 289ff. なおアウグスティヌスの聖餐に関する全ての箇所を取り上げ、検討している基本的な文献、K. Adam, *Die Eucharistielehre des hl. Augustin*, Paderborn 1908 は見るに値が出来なかった。新しい研究としては、サージューのものが詳しい。彼はアウグスティヌスの聖餐に関するテキストを年代順に並べて論じている。A. Sage, *op. cit.* p. 209-240 を参照。
- (3) アウグスティヌスが四〇年間仕えたヒッポ・レギウスの教会で、聖餐に関する説教をどのような状況で行っていたかについては、レットアーとヴァン・デル・メールが詳しく取り扱っている。W. Roetzer, *Des Heiligen Augustinus Schriften als liturgie-geschichtliche Quelle. Eine liturgie-geschichtliche Studie*, München 1930, p. 173-179; F. van der Meer, *Augustine the Bishop. The Life and Work of a Father of the Church*, tr. by B. Battershaw and G. R. Lamb, London/New York, 1961, p. 371-382 を見よ。また、アウグスティヌスの復活祭の説教を編纂しているポネのつかむじつた解説も参考にせよ。S. Poque, *Augustin d' Hippone, Sermons pour la Pâque*, introduction, texte critique, traduction et notes (SC 116), Paris 1966, 特別 p. 55-115.
- (4) Augustinus, *Sermo 132, 1*: "Sicut audivimus, cum sanctum Evangelium legeretur, dominus Jesus Christus exhoratus est promissione vitae aeternae ad manducandum carnem suam et bibendum sanguinem suam. Qui audistis haec, nondum omnes intellexistis...."

Qui jam manducant carnem domini, et bibunt sanguinem eius, cogitent quid maducent, et quid bibant : ne, sicut dicit Apostolus, iudicium sibi manducent et bibant. Qui autem nondum manducant, et nondum bibunt, ad tales epulas invitati festinent. Per istos dies magistri pascunt, Christus quotidie pascit. Mensa ipsius est illa in medio constituta. Quid causa est, o Audientes, ut mensam videatis, et ad epusa non acedatis? Et forte modo cum Evangelium legeretur, dixistis in cordibus vestris : Putamus quid est quod dicit, caro mea vere esca est, et sanguis meus vere potus est? Quomodo manducatur caro domini, et bibitur sanguis domini? Putamus quid dicit? .... Aures enim corporis patentis habes, quia verba quae dicta sunt audis : sed aures cordis adhuc clausas habes, quia quod dictum est non intelligis. Disputo, non dissero. Ecce Pascha est, da nomen ad Baptismum. Si non te excitat festivitas, ducat ipasa curiositas : ut scias quid dictum sit, Qui manducat carnem meam, et bibit sanguinem meum, in me manet, et ego in illo. Ut scias mecum quid dicitum sit, pulasa. aperietur tibi : ita et ego pulso, aperi mihi. Auribus personans, ad pectus pulso.”(BEN 5/1, 930f.)

- (5) ペリカンも同様な印象を表明している。J. Perikan, The アウグスティヌスの聖餐理解 (宮谷)

Christian Tradition. A History of the Development of Doctrine. I The Emergence of the Catholic Tradition (100–600), Chicago/London 1971, p. 394f. "Augustin's doctrine about <the sacrament of the body of Christ> was less explicit than his doctrine about baptism, not because he spoke of it less often (though he probably did), but because he did not specify it's content with equal detail."

- (6) Augustinus, Enarr. in Ps. 98, 9: "Et quia in ipsa carne hic ambulavit, et ipsan carnem nobis manducandam ad salutem dedit: .... Tunc autem, quando hoc dominus commendavit, de carne sua locutus erat, et dixerat : Nisi quis manducaverit carnem meam, non habebit in se vitam aeternam."(CCL 39, 1385).

Ibid. "Spiritualiter intellegite quod locutus sum; non corpus quod videlis, manducaturi estis, et bibituri illum sanguinem, quem fusuri sunt qui me crucifigent. Sacramentum aliquod vobis commendavi; spiritualiter intellectum vivificabit vos. Etsi necesse est illud visibilibus celebrari, oportet tamen invisibiliter intellegi."(CCL 39, 1386)

- (7) E. Loofts, Art. Abendmahl, in : Hauck–Herzok, hersg. Realencyklopädie, Bd. 2. 61–63.  
 (8) E. Portalié, Augustin, in: Dictionnaire de Théologie

Catholique I, Paris 1930, col. 2416ff.

- (㉟) L.-J. Van der Lof, Eucharistie et présence réelle selon saint Augustin (à propos d' un commentaire sur De civitate dei X, VI), in : Revue des Études Augustiniennes 10, 1964, p. 296 ; "Il ya une première tension entre le sacrement comme corps et sang du Christ et le sacrement comme image et signe de ce corps et de ce sang."
- (㊱) Augustinus, De civ. dei, 10, 6: "Hoc est sacrificium Christianorum: multi unum corpus in Christo. Quod etiam sacramento altaris fidelibus noto frequentat ecclesia, ubi ei demonstratur, quod in ea re, quam offert, ipsa offeratur." (BA 34, 448)
- (㊲) B. Altaner, Patrologie. Leben, Schriften und Lehre der Kirchenväter, 21. Aufl. Feiburg im Breisgau 1978, p. 445.
- (㊳) G. Bardy, Le sacrement de l'autel, in: BA 34, p. 617. ㊳ ㊳ ㊳ ㊳ ㊳ ㊳ Ch. Boyer, L' eucharistie selon s. Augustin, in: Augustinus 12, 1962, p. 125-138; F.-J. Thonnard, Saint Augustin et L' Eucharistie, in : BA 34, p. 811-812; B. Roetzer, op. cit. p. 95f.: L.-J. der Lof, Eucharistie et présence réelle selon saint Augustin (à propos d'un commentaire sur De civitate dei X, VI), in : Revue des Études Augustiniennes 10, 1964, p. 295-
- 304 ㊳ ㊳ ㊳ ㊳ ㊳ ㊳
- (㊴) F. Loofs, Leitfaden zum Studium der Dogmengeschichte, hrsg. von K. Aland, Tübingen 1959, p. 328.
- (㊵) R. Seeberg, Lehrbuch der Dogmengeschichte, 2. Bd., p. 454. ローザ ㊴ ㊴ ㊴ ㊴ ㊴ ㊴ Cf. B. Lohse, Epochen der Dogmengeschichte, Stuttgart '1978, p. 142 f.
- (㊶) ㊶ ㊶ ㊶ ㊶ ㊶ ㊶
- (㊷) B. Altaner, op. cit., p. 445.
- (㊸) W. Simonis, Ecclesia visibilis et invisibilis. Untersuchung zur Ekklesiologie und Sakramentenlehre in der afrikanischen Tradition von Cyprian bis Augustinus, Frankfurt am Main 1970, p. 109ff. ㊸ ㊸ ㊸ ㊸ ㊸ ㊸ "Die Frage, ob Augustinus Symbolist oder Realist gewesen ist, hat schon immer die Gemüter der Theologen beschäftigt und erhiert. Daß die Beantwortung dieser Frage aufs stärkste von der Stellung des Beantwortenden zu dieser Sache präjudiziert war, ist ganz naheliegend : doch kann dies nicht von der Aufgabe entbinden, die der dogmengeschichtlichen Forschung als historisch-kritischer Wissenschaft doch gestellt bleibt. Immerhin könnte man wohl dafür halten, daß sich die Frage Realismus oder Symbolismus

- in der Schärfe, wie sie sich späteren Zeiten gestellt hat, für Augustin nicht stelle, und daß es deshalb unsachlich sei, jetzt bei ihm eine Antwort auf diese Frage zu suchen..."; *ハーミン* の次のように訳してゐる。A. Sage, op. cit. p. 209; "La doctrine eucharistique de saint Augustin se délivre peu à peu des ambiguïtés où l'on avait cru l'enfermer." *ペリカン* の第 10 回 1987 年 12 月号。 Cf. J. Pelikan, op. cit., p. 305.
- (31) B. Lohse, *Epochen der Dogmengeschichte*, 4. Aufl. Göttingen 1978, p. 140f.
- (32) A. Trapè, S. Agostino, in: *Patrologia vol. III. Dal concilio di Nicea (325) al concilio de Calcedonia (451)*. I Padri latini a cura de A. de Berardino con presentazione de J. Quasten, Roma 1978, p. 423f.
- (20) トラペ以外にも、アウグスティヌスが犠牲説を採つてゐることを著者は多し。たゞ、J. Betz, op. cit., p. 153; L.-J. van Lof, op. cit., p. 303f. を参照。
- (21) この点で大変興味深く、また注目に値するのせ、現在刊行中の新しい *Theologische Realenzyklopädie* Bd. I (Berlin 1977) にもある項目 "Abendmahl" や "Abendmahlsfeier" の取り扱い方もある。著者の「面」は二一八五頁にわたり詳細な記述があり、そのなかで "Das Abendmahlsgespräch in der ökumenischen Theologie der Gegenwart" "Die Abendmahlsfeier in ökumenischer Sicht" という主題を掲げて論じてゐる。ここには各国の「また各教派間の聖餐をめぐる対話や共同作業」およびその成果が具体的に取りあげられ、報告されてゐると同時に、おおくの資料や文献が列挙されており、今日における状況がよくわかる。また最近刊行された *Wörterbuch des Christentums* (Gütersloh 1988) の項目 "Abendmahl, Eucharistie" にも、最近の展開を取り上げ、具体的な状況の報告がまごもつてある。そのなかで、例えば、次のような指摘がなされてゐる。"Seit den 60er Jahren kommen zunächst im katholischen Raum, dann im ökumenischen Gespräch, schließlich in gemeinsamer theologischer Reflexion bemerkenswerte Veränderungen in Gang." (p.20).
- 今手元にある資料 'Dialog der Kirchen Bd. 4, Ökumenischer Arbeitskreis evangelischer und katholischer Theologen. Lehrverurteilungen-kirchentrennend? 1. Rechtfertigung, Sakramente und Amt im Zeitalter der Reformation und heute, hrsg. von K. Lehmann und W. Pannenberg, Göttingen 2. Aufl., 1987, p. 89ff.; R. Friedling und W. Schöpsdau, Lehrverurteilungen damals und heute. Eine evangelische Arbeitshilfe zum Ergebnis der Gemeinsamen Ökumenischen Kommission, Göttingen 1987, p. 33ff.; *Confessio Augustana*, Bekenntnis des einen Glaubens. Gemeinsame Untersuchung lu-

therischer und katholischer Theologen, hrg. von H. Mayer, H. Schütte, Frankfurt am Main 1980, p. 198ff. をみると、ドイツ（とスイス）における共同研究が長年続けられ、実りある成果が得られたことがわかる。

この点で我が国における状況は遅れていると言わざるをえない。ただ、最近、『洗礼・聖餐・職務 教会の見える一致をめざして』、日本キリスト協議会信仰と職制委員会・日本カトリック教会エキュメニズム委員会編訳、日本基督教団出版局、一九八五年が出たので、これが対話と共同研究への一つの刺激になるかもしれない。

- (22) アウグスティヌスがキリスト教の歴史における聖餐理解に対して重要な地位をしめていることは、一般に認められている。カトリックの聖餐論を歴史的に論じた本のなかで、ガノスツィは、アウグスティヌスの sacrament 理解は画期的であったとのべており (A. Ganoczy, Einführung in die katholische Sakramentenlehre, Darmstadt 1979, p. 15: "Mit Augustinus tritt eine wahrhaft epochale Wende im christlichen Sakramentsverständnis ein.")。また、ヴェンツはプロテスタントの sacrament 論を扱った著書で「アウグスティヌスによる sacrament 論の基礎づけ」(G. Wenz, Einführung in die evangelische Sakramentenlehre, Darmstadt 1988, p. 13ff. "Die Begründung der Sakramentenlehre durch Augustin") を論じている。教父たちの聖餐に関する記述を編纂したシェリンは、アウ

グスティヌスの著作から多くの簡書を選び出しているものではなく、彼の神学的貢献を指摘する (D. J. Sheerin, ed., The Eucharist <Message of the Fathers of the Church 7>, Delaware 1986, p. 53; 93f.; 239f. 本書は英訳による貴重な資料集でもある)。ローゼは sacrament 論を教理史的に扱うなかで、アウグスティヌスを抜きにしては、中世のそれを理解出来ないと断言する (B. Lohse, op. cit. p. 139; "Augustin hat vor allem auch als erster Theologe grundsätzliche Erwägungen über das Wesen des Sakraments angestellt, ohne welche die gesamte mittelalterliche Lehre von den Sakramenten überhaupt nicht verständlich ist. Auch in dieser Hinsicht verdankt das Mittelalter, ja die Kirche überhaupt, Augustin die wesentlichen Anstöße)。ローフスもアウグスティヌスの聖餐理解がそれ以後の西洋における展開にとって大きな意義を有していると指摘している。F. Loofts, op. cit. p. 326; "Doch ist es nötig, auf Augustins Anschauung vom Abendmahl etwas näher einzugehen, weil sie von weitrager Bedeutung geworden ist für die abendländische Entwicklung"。実際、過去の歴史において聖餐の問題を論ずる場合、アウグスティヌスの聖餐に関する発言とその理解は、カトリック教会にとっても、プロテスタントの教会にとっても、神学的な根拠としてしばしば引照された。例えば、カ



トリック側としては、トマス・アクイナス『神学大全』第三部七三問―八三問、トレント公会議第十三総会「聖体についての教令」、レオ十三世の回勅「ミレ・カリターティス」などを挙げる事が出来る。プロテスタントの代表的な例としては、ルター『大教理問答』第五部「聖餐の聖礼典について」、ツヴィングリ『聖餐論』、ブツァー『信仰の提要』十八「聖餐論」、カルヴァン『キリスト教綱要』第四編十七章、リドリ『実体変化説の誤謬を駁する論説』などがある。ついでに最後に挙げたりドリの書から引用してみる。彼は長い論述の結論部分で次のように書いている。「さて、これで終わりにして良いくらいである。というのも、アウグスティヌスはこの問題に関して十分かつ明瞭に語っており、しかも彼は偉大な権威であるので、神のみ言葉に堅く立ち、かつ他の初代の教父と一致しているその言明を聞いた以上は、もはやほかの資料を持ち出してこの問題を確認する必要はないはずだからである。」(中村茂訳『宗教改革著作集 一―イングランド宗教改革 一』、教文館、一九八四年、二三〇頁)。

このようにアウグスティヌスの聖餐論は重要であるが、わが国における研究はほとんどない。外国の文献については C. Andresen *Bibliographia Augustiniana*, Darmstadt, 1973, p. 192f.; R. Lorenz, *Zwölf Jahre Augustinusforschung* (1959-1970), in: *Theologische Rundschau* 40, 2, 1975, p. 101-107 を見よ。

アウグスティヌスの聖餐理解 (宮谷)

- (23) Augustinus, Ep., 138, 7: "... signorum, quae cum ad res divinas pertinent, sacramenta appellantur." (CSEL 34, 2, 131).
- (24) Augustinus, De cath. rud., 26, 50: "De sacramento sane quod accipit, cum ei bene commendatum fuerit, signacula quidem rerum divinarum esse visibilia, sed res ipsas invisibiles in eis honorari;" (BA 11, 136).
- (25) Augustinus, De civ. dei, 10, 5: "... sacramentum, id est sacrum signum est." (BA 34, 440). なおアウグスティヌスが sacramentum を印 (signum) とみなしている箇所はこれ以外にも多く見いだせる。これがアウグスティヌスの sacramentum 理解の特色の一つである。Enarr. in Ps., 3, 1; ep. 89, 9; de doct. chr., 3, 9, 13; c. Adim. 12, 3; ep. 89, 9 などを参照。アウグスティヌスはまた "sacramentum" と同じ意味で "similitudo, figura, imago, umbra" などの用語を使用することもある。その他の用例と箇所については Sage, op. cit. p. 216 を見よ。
- (26) Augustinus, De doct. chr. 2, 1, 2.
- (27) Augustinus, De doct. chr., 1, 2, 2, "... signa: res eas videlicet quae ad significandum aliquid adhibentur." (BA 11, 182). Ibid., 3, 9, 13 を参照。
- (28) Ibid., 2, 1, 1: "Signum est enim res, praeter speciem quam ingerit sensibus, aliud aliquid ex se faciens in cogitationem venire;" (BA 11, 238).

- (29) 上記注(24)の引用文を見よ。
- (30) 上記注(25)の引用文を見よ。
- (31) Augustinus, Sermo 272: "Ista, fratres, ideo dicuntur sacramenta, quia in eis aliud videtur, aliud intelligitur." (BEN 5/1, 1614).
- (32) Ibid., "... quod intelligitur..." アウグスティヌスにおける *intelligere* という言葉は一般に使用される訳、理解する、知解する、というよりも、直観するという意味あいがつよい。この点に関して筆者は、一九八九年七月、京都大学中世哲学会で、「アウグスティヌスにおける信仰と理性」と題して研究発表をして、詳しく論じた(論文としては未発表)。この前提となる研究の一部としては、宮谷宣史「アウグスティヌスにおける信仰と知解」・『中世思想研究』二四、一九八二年、一六九—一七二頁のまとめを参照。フォン・エスは筆者とは方法も結論も異なるが、アウグスティヌスにおける *intellectus* の意味に注目し、「オメーラを引き合いにしながら」"act of seeing" という意味がある」と指摘している。 Cf. W. G. von Jess, Reason as Propaedeutic to Faith in St. Augustine, in: International Journal for Philosophy of Religion, 5, 1974, p. 226. ちなみに、キリスト教著作家のラテン語辞書の編纂者ブレズも、この言葉に "façon de voir" という意味があると記している。 Cf. A. Blaise, Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens, Tournhout 1954, p. 461.
- (33) Augustinus, Sermo 272; "... mysterium vestrum in mensa dominica positum est" (BEN 5/1, 1614); Sermo 227 も参照。
- (34) キリシヤ語の *μυστήριον* とラテン語の *sacramentum* の関係については Ch. Mohrmann, Études sur le latin des chrétiens, Tome 1, Roma 1961, p. 233ff. の詳しい研究を参照。アウグスティヌスにおける *mysterium* と *sacramentum* の関係については C. Couturier, op. cit., 269ff. によると、意味上、とくに区別はない。たしかに、アウグスティヌスには *sacramentum dei* と *mysterium dei* が (cf. sermo 91, 3) あるいはまた *sacramentum unitatis* と *mysterium unitatis* が (cf. sermo Guelf. 7) 同じ意味で出ている。レンメンスによると、アウグスティヌスははじめ *sacramentum* を *mysterium* という意味あいでも理解し、使用していたが、ドナティスト論争を契機に、*sacramentum* を *signum* に関わらせるようになった、という。この点については R. Lorenz, op. cit. p. 103 を見よ。
- ギリシヤ語の *μυστήριον* とラテン語の *sacramentum* という訳語を与えたのは、アウグスティヌスと同じ北アフリカの教父、テルトゥリアヌであった。しかし彼以前に、いわゆる古ラテン語訳聖書 (Itala) ですでに使用されていた。これはウルガタが *mysterium* と訳していたことを思うとき、興味深い。 *sacramentum* の概念史については C. P. Mayer, Die Zeichen in der geistigen Entwicklung und

in der Theologie des jungen Augustinus, Würzburg 1969, p. 289ff.; G. Wenz, op. cit. p. 11ff. を参照。

アウグスティヌスの場合の "sacramentum" は、広義では超自然的な神的・霊的現実を、狭義には、洗礼と聖餐を、その二つに使用をなしている。F. Hofmann, Der Kirchenbegriff des hl. Augustinus, München 1933, p. 335; J. Finkenzeller, op. cit. p. 39ff. が詳しく扱っているのを参照しよう。

- (55) Augustinus, Sermo 227: "sacramentum mensae dominica". (SC 116, 236) Cf. sermo Guelf. 7, 1. 聖餐の呼び方については、アウグスティヌス以前の教父たちの場合いくつかの異なる用語の使用が見受けられる。テルトゥリアヌスは "figura corporis" (adv. Marc. 4, 40, 3) "vivivium dominicum" (de orat. 19, 1), コリントスでは "cibus dominicus" (de tr. 8, 13), マンブロンタヌスは "figura corporis" (de sacr. 5, 21) などの表現を用いている。先述のわたしのアウグスティヌスも "figura corporis" (c. Adim. 12, 3; de doct. chr. 3, 16, 24; ennar. in Ps. 3, 1) "mensa dominica" (sermo 329; sermo 272), "sacramentum altaris", "convivium corporis et sanguinis" (ep. 44, 10) などの名称を用いている。その他の用例と箇所については、Sage, op. cit. p. 210f. を参照。

聖餐を表すラテン語は *eucharistia* である。この語も、勿論、ギリシャ語の *εὐχαριστία* に由来しているが、

アウグスティヌスの聖餐理解 (宮谷)

アウグスティヌスも用いている (sermo 57, 7, 7; sermo 58, 4, 5; sermo Den. 3, 3; ep. 54, 7)。*eucharistia* というラテン語の使用例は、すべてテルトゥリアヌス (orat. 19) にも、またキプリアヌス (ep. 15, 1) にもある。詳しくは、Chr. Mohrmann, Die altchristliche Sondersprache in den Sermones des hl. Augustin, Amsterdam 1965, p. 112ff. 及び Betz, op. cit. p. 26ff. を参照。

- (56) Augustinus, Tract. in Joh. ev., 80, 3; "accedit verbum ad elementum, et fit sacramentum ...". (CCL 36, 529).  
アウグスティヌスのサクラメント理解をよく引用されるこの箇所は、前後関係からみると、洗礼についての表現である。ただ、これを内容的に聖餐にもあてはめて解釈することは可能である。サクラメント言葉の関係を詳しく論じている箇所として C. Faust, 19, 16 を挙げることが出来る。これらの箇所の解釈については、A. Schindler, Augustin, in: Theologische Realenzyklopädie 4, p. 676f. 及び G. Kretschmar, Abendmahl, in: Theologische Realenzyklopädie 1, p. 83ff. 及び B. Lohse, op. cit. p. 139f. を参照。
- (57) 例として、Sermo 227 "Panis ille quem videtis in altari sanctificatus per verbum dei..." (SC 116, 234); sermo Wolf. 7 などを参照。その他の箇所とその意味については A. Sage, L'Eucharistie dans la pensée de s. Augustin, in: Revue de Études Augustiniennes 15, 1969, p. 224 などを注55の文献が参考になる。

- (88) トムニスノキリスルニヨクノルノ言ヲ以テ其ノ代表的ナル由ヲ示ス  
 № De mag. 2, 3f; de doctr. chr. 2, 3, 4.
- (89) Cf. C. Faust. 19, 16.
- (90) Cf. De tr. 3, 4, 9; sermo 91, 3; sermo 227. ヲヨクノルノ事ニ  
 ヲテ A. Schindler, Art. Augustin, in: TRE Bd. 4, p. 676;  
 C. W. Dugmore, Sacrament and Sacrifice in the Early  
 Fathers, in: Journal of Ecclesiastical History 2, 1951, p.  
 27; A. Adam, Lehrbuch der Dogmengeschichte, Bd. 1,  
 Die Zeit der alten Kirche, Gütersloh 1965, p. 289; W.  
 Gessel, Eucharistische Gemeinschaft bei Au-  
 gustinus, Würzburg 1966, p. 165ff. 参考 Lorenz, op.  
 cit. p. 105; Ganoczy, op. cit. p. 17; Sage, op. cit. p. 231 以下  
 参考文献。
- (91) Augustinus, Enarr. in Ps., 98, 9: "...spiritaliter in-  
 tellegite quod locutus sum; non hoc corpus quod vi-  
 delis, manducaturi estis, et bibituri illum sanguinem,  
 quem fusuri sunt qui me crucifigent. Sacramentum  
 aliquod vobis commendavi. spiritaliter interlectum  
 vivificabit vos. Etsi necesse est illud visibiliter cele-  
 brari, oportet tamen invisibiliter intellegi." (CCL 39,  
 1386) Cf. Tr. in Joh. ev., 26, 11.
- (92) Augustinus, Tr. in Joh. ev., 26, 11; "sed aliud est  
 sacramentum, aliud virtus sacramenti." (CCL 36, 265).  
 Cf. de div. quest. 83, qu. 36, 2: Simonis, op. cit., p. 111.
- (93) Augustinus, Sermo 272: "Hoc quae videtis in altari  
 dei, etiam transacta nocte vidistis: sed quid esset, quid  
 sibi ellet, quam magnae rei sacramentum contineret,  
 nondum audistis. Quod ergo videtis, panis est et calix:  
 quod vobis etiam oculi vestri renuntiant: quod autem  
 fides vestra postulat instruenda, panis est corpus  
 Christi, calix sanguis Christi. Breviter quidem hoc dic-  
 tum est, quod fidei forte sufficiat: (BEN 5/1, 1614)
- (94) Cf. Augustinus, De mag. 2, 3; de doctr. chr. 2, 3, 4; c.  
 Faust. 19, 16f.
- (95) Augustinus, C. Faust. 19, 16.
- (96) Augustinus, Sermo 272: "Sed fides instructionem  
 desiderat. Dicit enim Prophetar: Nisi credideritis, non  
 intelligetis. Potesis enim modo dicere mihi: Praece-  
 pisti ut credamus, expone ut intelligamus." (BEN 5/1,  
 1614)
- (97) Ibid. "Ibi est modo sedens ad dexteram Patris: quo-  
 modo est panis corpus ejus? et calix, vel quod habet  
 calix, quomodo est sanguis ejus? Ista, fratres ideo di-  
 cuntur sacramenta, quia in eis aliud videtur, aliud in-  
 telligitur. quod videtur, speciem habet corporalem,  
 quod intelligitur, fructum habet spiritualem. Corpus  
 ergo Christi si vis intelligere, Apostolum audi dicentem  
 fidelibus, Vos autem estis corpus Christi, et membra."

Si ergo vos estis corpus Christi et membra, mysterium vestrum in mensa Dominica positum est: mysterium vestrum accipitis. Ad id quod estis, Amen respondetis, et respondendo subscribitis. Audis enim, <Corpus Christi> et respondes, Amen. Esto membrum corporis Christi, ut verum sit Amen. Quare ergo in panis? Nihil hic de nostro afferamus, ipsum Apostolum identidem audiamus, qui cum de isto sacramento loqueretur, ait, <Unus panis, unum corpus multi sumus.>” (BEN 5/1, 1614)

- (㉞) Augustinus, Sermo 227; “Magna ergo sacramenta et valde magna. Vultis nosse quodmodo commendentur? Ait Apostolus: <Qui manducat corpus Christi aut bibit calicem domini indigne, reus est corporis et sanguinis domini.> Quid est indigne accipere? Contemptiniliter accipere, irridenter accipere. Non tibi viatur vile, quia vides. Quod vides transit, sed quod significatur invisible non transit, sed permanet. Ecce accipitur, commeditur, consumitur. Numquid corpus Christi consumitur? numquid ecclesia Christi consumitur? numquid membra Christi consumuntur? Absit.> (SC 116, 242)
- (㉟) Augustinus, De civ. dei, 21, 25; “Qui manducat carnem mean et bibit sanguinem meum, in me manet,

et ergo in eo. Ostendit quid sit in sacramento tenuis, sed re vera corpus Christi manducare et eius sanguinem bibere; hoc enim est in Christo manere, ut in illo maneat et Christus.” (BA 37, 488) この箇所の意味は、こゝに於て Loofs, op. cit. p. 326ff. を参照。

- (㊱) Augustinus, Tract. in Joh. ev., 27, 11; “Hoc totum quod dominus de carne et de sanguine suo locutus est, et quod in eius distributionis gratia vitam nobis promisit aeternam, et quod hinc voluit intellegi manducatores et potatores carnis et sanguinis sui, ut in illo maneat et ipse in illis …” (CCL 36, 275)

- (㊲) Augustinus, Sermo 272; “Quare ergo in panis? Nihil hic de nostro afferamus, ipsum Apostolum identidem audiamus, qui cum de isto sacramento loqueretur, ait, <Unus panis, unum corpus multi sumus.>” (BEN 5/1, 1614). 同様の説明が次の箇所に於ても見られる。Tract. in Joh. ev. 26, 12ff.; sermo 57, 7.

- (㊳) トマス・アクィナスの聖餐に関する説教の題目は、*De panis et calicis in eo*。 Cf. Sermon. 227; 272; Guelferb. 7; Den 3; tr. in Joh. ev. 26, 13.

- (㊴) Augustinus, Guelferb. sermo 7; “Unis panis, dixit (sc. Apostolus). Quodquod ibi panes positi fuerint, unus panis: quodquod panes fuerint in altaribus Christi hodie per totum orbem terrarum, unus panis est. Sed

quid est, unus panis? Exposuit brevissime: unum corpus multi sumus. Hoc panis corpus Christi, de quo dicit Apostolus ecclesiam: <vos autem estis corpus Christi et membra.> Quod accipitis, vos estis, gratia qua ridempti estis; ... Hoc quod videtis, sacramentum est unitatis." (MA 1, 463)

- (17) Ibid., "sacramentum unitatis". cf. tr. in Joh. ev. 26, 13; 27, 17.
- (18) Augustinus, Sermo 227; "commendatur vobis in isto pane quomodo unitatem amare debeatis." (SC 116, 236)
- (19) Augustinus, Sermo 272; "intelligite et gaudete. unitas, veritas, pietas, charitas." (BEN 5/1, 1614.) この段は次の箇所も参照; de bap. 5, 8, 9; de mer. et rem. pecc. 1, 34.
- (17) 注25に挙げた箇所を参照。
- (18) Cf. Serm. 227; Guelferb. 7
- (19) Guelferb. sermo 7; "Ergo et in pane et in calice mysterium est unitatis." (MA 1, 463)
- (19) Augustinus, Sermo 272; "Ita et dominus Christus nos significavit, nos ad se pertinere voluit, mysterium pacis et unitatis nostrae in sua mensa consecravit." (BEN 5/1, 1615f.)
- (19) アウグスティヌスのこのようなサクラメント理解の背後には、ドナティストとの論争の経験がある。しかし、この

では、この問題は取り上げないことにする。この点について詳しくは、先に挙げたシモニスの研究を見よ。また、ドナティストとアウグスティヌスのサクラメント観の相違については、宮谷宣史『アウグスティヌス』講談社一九八一年、一八二頁以下を参照。Sage, op. cit. p. 215を参照。

- (20) Cf. Augustinus, De div. quaest. 83, qu. 69, 9; c. Faust. 20, 21.
- (21) Cf. Altaner, op. cit.; Bardy, Saint Augustin et l'Euchariste, in: BA 37, 811f.; Trape, op. cit. 上巻註(二) (21) (21) を参照。
- (22) Augustinus, De civ. dei 10, 6; "Hoc est sacrificium Christianorum: multi unum corpus in Christo. Quod etiam sacramento altaris fidelibus noto frequentat ecclesia, ..." (BA 34, 448)
- (23) Ibid., "...: ad probandum quae sit voluntas dei, quod bonum et bene placitum et perfectum, quod totum sacrificium nos ipsi sumus. ..."
- (24) Cf. Augustinus, De tr., 4, 3, 6; 4, 6, 10.
- (25) Augustinus, Ep. 98, 9; "sacramentum fidei" (CSEL 34 /2, 531); cf. ep. 23, 9.
- (26) この点については、A. Ganoczy, op. cit., p. 16ff. を参照しよう。なぜ、アウグスティヌスの哲学と聖餐論の問題は、このように、C. P. Mayer, Philosophische Voraussetzungen und Implikationen in Augustins Lehre von

den Sacramenta, in: Augustiana 22, 1972, p. 53-79 である。

- (69) 中世の聖餐論争について H. Feld, Das Verständnis des Abendmahls, Darmstadt 1976, p. 93ff.; G. Macy, The Theologies of the Eucharist in the Early Scholastic Period, Oxford 1984; B. Neunhouser, Eucharistie in Mittelalter und Neuzeit (Handbuch der Dogmengeschichte Bd. 4, 4b, hrsg. M. Schmaus/A. Grillmeier), Freiburg・Basel・Wien 1963, p. 11ff. など、新しい叙述として参考になる。

(70) Cf. Augustinus, De doctr. chr. 1, 3, 3f.

- (71) Cf. Ambrosius, De mysteriis; sermones de sacramentis.

ポルタリエは、アウグスティヌスの聖餐理解はアンブロシウスのそれと全く同じである、と主張する。Portalié, op. cit. col. 2416ff. ところが、アンブロシウスとアウグスティヌスは、全く図式化されるものとして取り上げられ、その象徴説と実在説を代表するものとして取り上げられ、その立場の相違が指摘されるのが普通である。例えば、次の標準的な教理史の叙述を参照。

B. Lohse, Epochen der Dogmengeschichte, Stuttgart 1978, p. 143 "Aber geschichtlich wirksam geworden ist von Augustinus Sakramentsanschauung vor allem Symbolismus, und zwar als Gegengewicht gegen den Rea-

アウグスティヌスの聖餐理解 (宮谷)

lismus des Ambrosius. ... Die verschiedene Auffassung

vom Abendmahl, die sich bei Ambrosius und bei Augustin zeigt, wirkte sich auch die Liturgie aus. ", H. Cunliffe-Jones with B. Drewery, ed., A History of Christian Doctrine, Edinburgh 1978, p. 179" ... Western eucharistic theology remained muchless uniform and besides the realism of Ambrose the ancient tradition of symbolism continued and received clearer definition in the thought of Augustin." ケーギンマンは、中世の聖餐論争の原因はアンブロシウスとアウグスティヌスの違いに原因がある。G. Macy, The Theologies of the Eucharist in the Early Scholastic Period, Oxford 1984, p. 24; "When the question arose of how the Lord was then to be understood as present in the Eucharist, different answers were forthcoming depending on whether theologians relied on the 'Ambrosian' or 'Augustinian' tradition."

- なおポルタリエと同様な解釈をしようとする例として、J. Betz, Eucharistie in der Schrift und Patristik(M. Schmaus und andere, hrsg., Handbuch der Dogmengeschichte, Bd. IV, 4a, Freiburg/Basel/Wien, p. 150)など。
- (72) Augustinus, De magistro, 3, 5; de doctr. chr. 2, 2.

(73) アウグスティヌスのキリスト論は、トマス・トマス・トマスと聖餐論争の理由をめぐってトマス・トマスの「T. van

Bavel, Recherches sur la Christologie de saint Augustin. L'humain et le divin dans le Christ d'après s. Augustin, Fribourg 1954<sup>1)</sup> の主題は「この新しい研究」は、W. Geerlings, Christus Exemplum. Studien zur Christologie und Christusverkündigung Augustinus, Mainz 1978<sup>2)</sup> が参考になる。

(74) Cf. Cyprianus, Ep. 63, 9: 14, 17.

(75) たとえば、「トレント公会議第十三総会(一五五一年)、第六章で、アウグスティヌスの著作を引用して、聖餐が「一致のしるし」であるという。教皇レオ十三世の回勅「ミレ・カリターティス」(一九〇二年)も同様である。プロテスタントでは、ツヴェインリ、カルヴァン、リドリなどが聖餐の意味について論ずるさいに、しばしばアウグスティヌスに言及している。上記注22を参照せよ。

付記: 本論文は、一九八九年九月一五日、東洋英和女学院短期大学で開かれた第四十回「キリスト教史学会」で行なった研究発表に、加筆したものである。